

雑司ヶ谷の御会式を通した子どもの多世代交流について

21218051 細野茜
指導者 葉袋奈美子 准教授

雑司ヶ谷 御会式 子ども
多世代交流 コミュニティ

1. 研究の背景と目的

近年、子どもの遊びには時間・空間・仲間の3間が足りないと言われている。車優先社会への変化に伴い遊び空間が消滅し、¹⁾放課後に屋外で遊ぶ時間や地域内での多世代交流の場が減少している。²⁾そのような場は子どもの成長に重要な役割を果たすものであると考える。雑司ヶ谷には江戸時代から続く御会式という地域行事があり、多くの世代が参加している。そこで本研究では祭りのような地域行事が子どもの地域交流や行動に与える影響を明らかにすることを目的とする。

本研究ではまず子どもの遊び場や行動範囲の変化を雑司ヶ谷に住む小学生と各講の中心人物へのヒアリング¹⁾により分析し、現在の子どもの御会式を通した交流の実態を調査するために豊島区内の小学校にアンケート²⁾を行った。加えて準備作業に参加し目視調査³⁾を行った。

2. 御会式の概要

御会式とは本来は宗派に関わらず祖師の命日に行う法会を指した。雑司ヶ谷では16・17・18日の3日間である。

講社とは、御会式に参加する集団のことである。雑司ヶ谷の講社の母体は町会のメンバーや仲の良い同級生同士など、その設立の背景は様々である。

雑司ヶ谷では地元講社が集まり、交流や情報交換を目的に1975年より御会式連合会を結成した。21講社が参加し、定例会や警察との打ち合わせ、立看板の設置など、1年間を通した様々な活動で御会式への準備を行う。こ

のように組織を作り運営している地域は他にない。³⁾

3. 時代による子どもの生活行動の違い

ヒアリングをもとに昔の子どもと今の子どもの遊びの場所を比較したものが表1、地域交流の違いを比較したものが表2である。駄菓子屋は全ての年代が利用している。昔は複数ある駄菓子屋の中から自分の小学校のテリトリー内の駄菓子屋を選んでいたが、現在は駄菓子屋自体が1つしかなく昔ほど頻繁には利用しない。空き地も消失し、かつての子どもの遊び場が失われていると言える。

遊び空間の使い方とそこで関わる人の相関を図1・2に表す。昔は空間を広く使う回遊型の遊びが多く、遊び場の数も多いため普段学校では接することのない大人や他校の子どもとの関わりが遊びに伴って生まれていた。現在は遊び場が幾つかに偏っており、一緒に遊ぶのは学校での友達が中心である。商店街での挨拶や御会式関連の行事で異世代と関わっており、地域交流の場に変化が見られる。

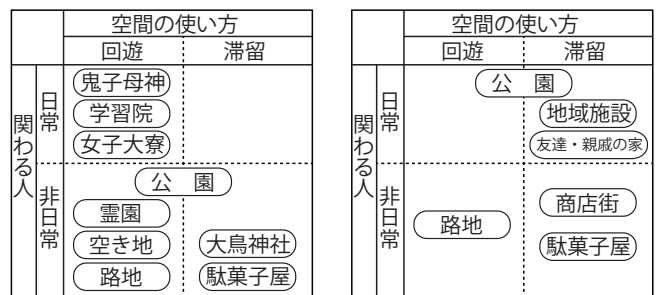


図1 昔の子どもの遊び分布

図2 今の子どもの遊び分布

表1 時代による子どもの遊び場の違い

	駄菓子屋	雑司ヶ谷霊園	学習院・女子大寮	大鳥神社	鬼子母神	官庁ビル	公園	路地	空き地	親戚・友達の家	地域内施設	商店街
60~50年前 n=2	○	○	◎	◎	○	○	◎	○	◎	◎	◎	◎
40年前 n=3	◎	◎	○	◎	○	◎	◎	○	○	◎	◎	◎
30~20年前 n=3	◎	◎	○	◎	○	◎	◎	○	○	◎	◎	◎
今 n=16	○	×	◎	◎	◎	◎	◎	○	○	◎	◎	◎

◎…よく遊ぶ ○…遊ぶ ×…使わない 斜線…聞き取りなし

表2 時代による子どもの地域との関わり

		地域との関わり
昔の子ども	60年前	<ul style="list-style-type: none"> ほうきを持って追いかけてくるおじさんがいて、怖がられていた。 他校の学区はテリトリーではないため、動き回る範囲に注意が必要 違う小学校の子どもとケンカ
	40年前 20年前	<ul style="list-style-type: none"> 高田の方を砂利場と呼び、その地域の子どものケンカ 公園霊園・他校の子どもと友達になり、一緒に遊ぶ 鬼子母神にうるさいおじさんがいた
今の子ども		<ul style="list-style-type: none"> 近所の人に挨拶 → 挨拶する 太鼓の練習で大人と話す → 店先で犬をさわる 縄の練習で年上の子どもと知り合いになる → 八百屋のおばあちゃんが声をかけてくれた 雑司ヶ谷霊園には行かない → おつかいに行く 商店街の人との交流

4. 御会式による行動範囲の広がり

以下は今年の御会式への参加日程について、豊島区の A 小学校に通う 3 年生から 6 年生に行ったアンケートの結果である。図 3 は、自分が参加した講社を選んだ理由についての結果である。学年が上がるにつれ、家族繋がりがよりも友達繋がりで参加と答える割合が増えている。

図 4 は参加状況を問うた結果である。5 年生までは毎年同じ講社に参加していると答える割合が多いが、6 年生は毎年同じ講社ではないと答える割合とほぼ同じであり、学年が上がるにつれ友達繋がりで様々な講社に参加する子どもが多いと考えられる。

図 5 は今年の御会式への参加日程と参加の仕方についてクロス集計した結果である。全体的に太鼓での参加が多く 3 日間全てに参加したと答えた子どもは纏で参加した子どもが最も多かった。

5. 御会式を通して行われる多世代交流

5-1. 練習を通じた交流 一太鼓・纏

御会式の準備には、太鼓・纏の練習、枝垂れ桜を模したという万灯の準備等がある。太鼓の練習は御会式連合会が主体となり毎年鬼子母神の境内で合同練習会が行われるが、リズムが覚えやすいため合同練習には参加しても各講での練習は行わない傾向にある。

小学生に行ったヒアリングでは纏の練習に参加している子どもから多世代交流に関するコメントが多く聞かれた。纏は練習を重ねる必要があるため、1 ヶ月～1 週間ほど前から練習を行う。練習では、大人が子どもに教える講や子ども同士で教えあう講もある。初めて参加する子どもが挨拶をする場でもある。このように、纏の練習は地域の中で異年齢の交流の場になっていると考えられる。

5-2. 共同作業を通じた交流 一万灯

万灯の準備は御会式の 1～2 週間前から行う。花作り・花開きは女性や子どもを中心に 20～30 人で作業を行う。小学生から高齢の方まで幅広い世代が集まり、皆で会話を交えながら作業する。また高齢の方が子どもや若い人にやり方を教えるなど、同じ作業を行うことで活発なコミュニケーションが生まれる。

出来上がった花は男性が中心になり、枝垂れ桜の枝にあたる竹竿部分につけて万灯を組み立てていく。この作業は花作り・花開きと一緒に行われることが多く、子どもは遊び感覚で男性たちの作業を手伝う。

万灯の準備は、大人たちが集まる場に子どもも加わり一緒に作業を行うことで、多世代交流の場になっている。

6. まとめ

昔の子どもは遊び場が多様であり、そこで人と出会い交流が増えるような場所で遊んでいたのに比べ、現在の子どもは遊び場が少なく特定の人との関わりしか生まれない場所で遊んでいることが分かった。また現在の子どもは友達繋がりでさまざまな講社に参加していることも分かった。昔のように人の輪が広がるような場所がなくなっているからこそ、御会式は子どもの行動範囲を広げ、新たな地域交流を促すという意味で重要である。

参考文献

- 1) 仙田満+上岡直見『子どもが道草できるまちづくり 通学路の交通問題を考える』p27,28 学芸出版社、2009 年
- 2) 文部科学省中央教育審議会生涯学習分科会 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo2/003/siryou/0602170/1/002/001.htm
- 3) わいわいぞうしがや 御会式知恵袋 p 1
- 4) 大正大学『1998 年度比較宗教論Ⅱ<祭りの意味と役割>報告書 祭りのダイナミズム-雑司が谷鬼子母神万灯練供養の研究-』
- 5) 豊島区教育委員会『雑司が谷鬼子母神御会式調査報告書』p2～12、p20～115 2014 年

注釈

1 ヒアリング調査概要

日程	9 月上旬から 10 月中旬
方法	地図を用いたヒアリング
対象	小学生 16 人 講社の中心人物(大人)13 人

2 アンケート調査概要

日程	11 月中旬 (要確認)
対象	豊島区内の A 小学校に通う児童。 3 年生 83 名, 4 年生 71 名, 5 年生 58 名, 6 年生 65 名の計 277 名から回収した。

3 目視調査概要

日程	10 月上旬から中旬
対象	千登世若睦, 三嶽中島講, 目白睦鬼神会, 目白睦商工睦 (五十音順)
内容	纏練習の見学, 花作りへの参与・見学など

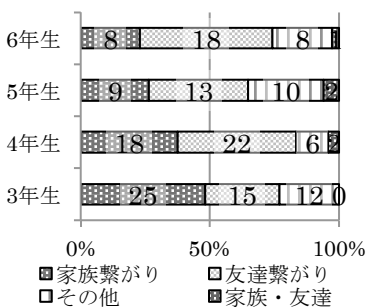


図3 なぜその講社に参加したか n=169

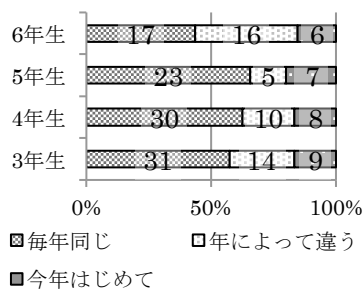


図4. 毎年同じ講社に参加しているか n=176

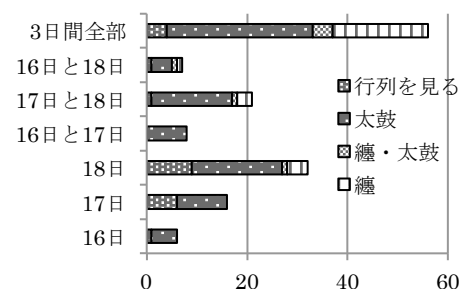


図5 参加日程と参加の仕方の関係 n=146